

カイツブリとびわ湖

—カイツブリを通してびわ湖の再生を考える—

服部 隆義（湖北町役場）

1. はじめに

「鴉」はカイツブリの古名である。びわ湖は、古来から「鴉の湖」と呼ばれている。カイツブリの湖と呼ばれるほど、両者の結びつきは深い。

カイツブリは留鳥であり、生息数の増減は、びわ湖の環境を示す一つの指標であると考えられる。つまり、その増減とその原因を調べることによって、びわ湖がどの程度の健全性を保っているのかを判断できるのである。

今回、カイツブリを「びわ湖再生の象徴」としてとらえ、エサである「魚」、住みかである「ヨシ原」の3つの関連について考える。そして、その関連からびわ湖の再生に向けて、「内湖」がいかに優れた場所であることを述べていきたい。最後に、現在の内湖の現状から、再生に向けて何が必要か検討したい。

2. カイツブリ、魚、ヨシ原の関連

毎年1月に行われているびわ湖水鳥一斉調査によると、びわ湖の水鳥は全体的に増加傾向にある。一方、カイツブリは、1988年の調査を境に大きくその数が減少してきている。カイツブリだけではなく、カワウを除く、魚をエサとしている他の水鳥も同様の傾向にある。

滋賀県の漁獲量調査によると、ホンモロコ・ボテなどの魚は減少傾向にある。地元漁師さんへの聞き取り調査においても、魚が少なくなったとの回答を得ている。

ヨシ原は、水の浄化作用に優れている。また、カイツブリにとって繁殖・エサ場であり、魚にとっても繁殖・エサ場である。しかし、湖岸道路の建設や干拓事業の影響で、その多くが失われている。1948年の調査において、520[㊦]存在していたヨシ原が、2000年には382[㊦]にまで減少（△26.6%）している。

びわ湖の再生のためには、この3つの営みを盛んにすることが重要と言えるであろう。

3. 内湖の重要性

内湖は、水が川からびわ湖へと流れる手前の内陸側に存在する水域である。水深は浅く泥底、風波の影響も少ないことから、カイツブリ・魚・ヨシにとって、絶好の環境と言える。しかし、びわ湖の内湖は、干拓事業などによって急激に減少している。

4. 私たちにできること

内湖は、水質の浄化、生き物にとって貴重な場所である。現在、湖北の湖岸で干拓田を常時湛水化するビオトープ事業が開始され、一定の成果を得ている。ビオトープ事業は、内湖の重要性を目にすることによってできるモデル事業である。内湖の再生のためには、多くの時間と費用、そしてこの事業の必要性を理解できる「びわ湖を愛する心」が必要である。ビオトープ事業や自然観察会などの自然保護活動を通じて、この心の輪が広がって行くことを期待したい。